

酒とイグアナの日々

山下正弘[†] (岐阜県獣医師会・山下獣医科院長)

臨床獣医師として何に喜びを感じるかは、人によって様々。専門性を追求し、研究と学会発表を生き甲斐にしている人を知っているし、身を捨てて深夜の診療にも対応し、飼い主の安心を担保することに情熱を燃やす人も知っている。一方で、動物診療を効率の良い金儲けの手段だと豪語し、片手ハンドルでフェラーリを乗り回しながらせっせと仕事に励む人も知っている。しかし私は、この稿で獣医療の倫理を説くつもりなどまったくないのでご安心を。単に、どうせ仕事をするなら楽しんでやってこそ、人生の醍醐味があるという思いから、私のおバカな日常診療と、それに直結した大いなる楽しみ的一端を垂れ流し、アラ還のご同胞と共に、一献傾けたいと願う。

世はインターネット時代。私もご多分に漏れず、暇さえあればパソコンの前でコチョコチョとやっている。最近、当院に来院されるある種の患者さんは、ほぼ全員がインターネットで検索して来たのだとか。本日のオーナーも、大事そうに持参した段ボール箱をおもむろに診察台の上に置き、不安そうに私を見つめる。ガムテープで厳重に蓋をしたその箱からは、何やらガサゴソと奇怪な音が聞こえている。スタッフがお互いの顔を見合せては、次に起こる出来事への準備を整えながら、そろりそろりと蓋を開けると、中から顔を覗かせたのは、全長60cmほどのミドルサイズのグリーンイグアナ。ケージのスノコに後肢の指が引っ掛かり患指があらぬ方向を向いていると、若い女性オーナーが悲しげな顔で訴える。

義を見てせざるは勇無きなり。首根っこと尾っぽの付け根を、素手でむんずと掴み、エイとばかり箱から引きずり出した。普段なら皮手袋の着用を欠かすことはないのだが、勢いというのは恐ろしいもので、今更引っ込みもつかない。当然ながら大暴れが始まり、剥き出しの腕にしがみ付かれたり蹴られたり、尻尾ビンタも飛んでくる。ご存知の通り、イグアナの爪は猫のそれを更に鋭く砥ぎ上げたような、まるで剃刀のように良く切れる。瞬く間に私の両の腕には幾本もの長い引っ掻き傷が刻まれ、ビーズのように連なり湧き出した血液は、やがて筋状になって腕を伝い、床に滴り落ちる。普通なら、ホラー映画の一場面でしかない光景だが、そこはそれ、同じ

イグアナ飼いのこと。以心伝心、むしろ嬉しそうに「すみませんう」の一言ですべてが収まる。

タオルで腕を拭きながら、一通りの説明を終えた後は、武勇伝の交換が始まる。お互いの体に残る古傷を見せ合いながら、それぞれの傷にまつわるエピソードを語り合う。これがイグアナ飼いの挨拶であり、相手の力量を探る一種の儀式でもある。

私は1頭のメスのグリーンイグアナを飼育して、かれこれ12年になる。京都のあるイグアナ仲間が、近所のホームセンターで、景品代わりに劣悪な環境でストックされていた子イグを保護し、里親を探しているという情報に触れ、取るものも取りあえず駆けつけたことが彼女との出会いであった。カナヘビを二回り大きくしただけの、可愛いトカゲでしかない個体は、雌雄の判別が難しかったが、その風貌から「ゴン」と名付けた。これが私の爬虫類飼育の、そして爬虫類診療に取り組む原点となった。そのゴンも、今や全長(吻端～尾端長)130cmの堂々たる熟女に成長し、過去には数十個の卵を産んだこともある。それはまた、当時も今も、わが国におけるイグアナ飼育のパイオニアであり第一人者である「山内イグアナ研究所」を知ったきっかけでもあった。山内氏からは、直接に間接に様々な教をいただいたが、何よりイグアナという生き物に対する深い理解と、飼育への哲学には感銘を受けた。同時に彼らを取り巻く悲惨な状況も知らされた。2,000円で売られている子イグを、フルサイズまでに育て上げ、20年以上の寿命を保証するためには、最低でも10万円以上の初期投資が必要である。

山下正弘

—略歴—

- 1977年 麻布獣医科大学卒業
- 同 年 動物病院勤務
- 1979年 岐阜県にて山下獣医科開業
- 2006年 (社)岐阜県獣医師会開業部会長



[†] 連絡責任者：山下正弘 (山下獣医科)

〒501-6264 羽島市小熊町島5-60

☎058-392-1622 FAX 058-391-0721

E-mail : vet-gonpapa@y2.dion.ne.jp

一年中、熱帯雨林の環境を再現するためのランニングコストは推して知るべし。オスなら2メートルに達し、ひと部屋を占拠される結果となることから、飼育には相当な覚悟がある。決して子供のオモチャではないことを我々はもっと啓蒙すべきだ。

爬虫類の世界は狭い。どこで爬虫類を診療してくれるかという情報は、インターネットや口コミを通じ、私の知らないところで広がっていく。インターチェンジが近い関係上、滋賀県や京都から、高速を利用して来院する人も珍しくないが、自分の力量に照らせば、冷や汗もの連続である。

そのような中、いわゆる飼育仲間のコミュニティーは、私の最もリラックスできる世界である。中でも、名古屋にある爬虫類専門店「ペポニ」は、私にとってのオアシスといって過言ではない。マネージャーのY氏は、日本でも指折りの飼育専門家である。時折訪ねては話をし、最新情報を仕入れる。彼は今、鷹狩に夢中であり、冬ともなれば愛鷹ハリスホークの「残波」と共に、フィールドを疾駆している。彼の人脈には、大学教授をはじめ、その道のオーソリティーが名を連ねる。時に彼らと呑む幸運にあずかるが、深夜まで話は尽きない。中でも、個人的な付き合いのある仲間と呑む酒は、明日のことも忘れて果てしなく続き、話題はすでに爬虫類にはない。酔いに任せ、人生の艱難辛苦、男としてのひと時代を彩ったおとぎ話など、気が付けば空は白みかけている。急ぎ帰路に就くも、新聞配達のおジサンとバッティングし、「おはようございます」などと気まずい挨拶を交わすことにもなる。

地元爬虫類仲間とのオフ会もまた捨てがたい。名古屋で飲むこともあれば、途中下車もある。今は死語になり

つつある“柳ヶ瀬”での飲み会は、それでもまた格別の趣がある。若かりし頃から通い詰めた古巣は、なんとも優しく私を迎え入れ、温めてくれるのである。爬虫類愛好家は、綺麗処との話題にも事欠かない。怖いもの見たさも手伝い、場は大いに盛り上がる。当然ここでも、腕の傷はモノを言う。

三年前から、地方紙の折り込み情報誌にコラムを担当しているが、ペンネームである「ゴンパパ」は、わが愛イグの名、ゴンちゃんに由来する。読者からの様々な反応が楽しみで続けているが、私には一貫したテーマがある。それは「いのち」と「社会性」。どこにでもある特定の疾患を解説するものとは一線を画したいところだ。

先回、爬虫類飼育とその餌になる小動物の関係を題材に、命の循環について書いた。映画「ザ・コーヴ」に象徴される動物愛護と食文化の問題にも通ずる話題であった。原稿の段階で身内から、気持ち悪い、こんなもの一般受けはしないとといった批判を浴びたが、思い切って載せてみればあに凶らんや、勉強になった、いろいろ考えさせられたという好意的な読者反応が寄せられた。

もはや爬虫類飼育は、特別の嗜好を持った変人の行為ではなくなったのかもしれない。少なくとも、私の仲間たちのような、科学の人の存在とリーダーシップがある限り、一部の不心得者によるダークなイメージは、いずれ雲散霧消することと信じている。

今宵も私は、ゴン姫を抱き、ケージの隅に緩くトグロを巻いてリラックスする蛇たちに目を細め、常夏の部屋に汗ばみつつ、冷えた缶ビールで喉を潤すのである。

“赤い灯青い灯の柳ヶ瀬”に、想いを馳せながら、明日こそは……。